



# 桃園 (トウバル)

## はじめに

桃園は宮城島の南西に位置し、水路を隔てて平安座島北側と相対する。集落の後方は、上原の高台をひかえてよい腰当(クサテイ)となり、冬は金武湾からの北風を防ぎ、夏は太平洋からの涼風が吹く自然条件に恵まれた位置にある。

この地に平安座島をはじめ、浜比嘉島、首里などから人々が移り住み、当初は上原の一部として屋取が形成され、大正5年に上原から行政区として分離した。桃園は漁業も盛んであったが耕地が狭いため、人々は長い年月をかけて農地の拡張に努力してきた。その造成法は「フチカチ」と呼ばれ、海岸に木竹をたてて組み、大雨で後方の傾斜地から流れてくる土砂を食い止めて土地を広げていった。フチカチのフチは、方言で「ヤーフフチン(家を建てる)」のフチと考えられるが海岸の淵(端)とも解される。カチは木竹で組まれた垣根のことである。



上空から見た桃園 写真提供: 寺下昌信氏

## 平宮の誕生

かつて桃園から屋慶名に渡るには、桃園港から定期船、あるいは干潮時に徒歩で平安座に渡り、そこからまた船を利用したり、徒歩で渡るといった交通の不便なところであった。1971年に本島と平安座を結ぶ海中道路が完成し、1975年にはCTS(石油備蓄基地)建設のため、平安座島と宮城島間の海岸が埋め立てられ「平宮」が誕生した。

平宮は平安座島の「平」と宮城島の「宮」の字からつけられた地名である。これによって今では、海中道路から平安座、平宮、そこから水路に架けられた橋を渡ると桃園となり、平宮の誕生によって、交通の不便さが解消された。

## 多いトウ(一) 原地名

桃園地名は、以前には県内で字名だけでなく十指余を数えた(『角川日本地名大辞典』・沖縄県)、『沖縄地名総集』(大城盛光編著)から桃園・当原・堂原・當原など、トー原系の地名を拾い上げると160余りをこえ、しかも国頭村から周囲の島々や宮古島・石垣島・与那国島まで全県的に広く分布している。

トー原のトーは、一般的に「桃」や「当」があてられ、本市内には、字名の桃園をはじめ、小字として津堅・浜・平安座・東恩納に桃園地名があり、兼

簡段は当原となつている。また堂原・道原と書いて「トーバル」「ドーバル」と呼ぶときもある。ただ「ドーバル」のときは意味が違う場合がある。地名研究家の久手堅憲夫氏は「(上り口説)に出てくる大道松原や北谷町砂辺の大道原は(弓なりに撓んだ地形の土地)」としている。

## トウ(一) 原の意味

トウ(一)原とは、平坦地のこと。方言では平坦にならすことを「トーミン」とか「トーナスン」という。狭小で平野の少ない沖縄だが農業や生活に便利な平坦なところが「トウ(一)」と呼称され地名としての数も多くなつたと考えられる。桃園も平坦地にあることから「トウバル」と呼ばれるようになった。

『沖縄風土記全集』(国頭村編)は、国頭村の桃園について「他の大方の部落には山はつきものだが、この部落は、周囲が平地で、山のかげは一つもない」と、トウバル地名の特徴を記述している。トウ原は、その平坦な地であることから上り下りの人生の綾に例えられて多くの琉歌に詠われた。

「若さひと時の通い路の空や 闇のさくひらも車たう原」(早作田節)  
 (若いころの恋人のもとに通う路は、闇夜の谷や坂であっても平坦な路と同じようなもので何の苦にもならない)

## 潟・阿下茶原

先述のフチカチによって干拓された土地(仕明地)は、それぞれの干拓者の名前をとって「・・・潟」などと呼ばれた。

潟とは、広辞林(三省堂)によれば「①潟湖、②遠浅の海で満潮に隠れ干潮に現われる所。ひがた。」などとある。潟は日常の生活圏にあり、昔から人々と密接な関係をもってきた。海に囲まれ沖縄では今話題の泡瀬干潟をはじめ多くの潟があり、地域によっては単に潟原とか潟といっている。

桃園にはウブガトと呼ばれる共同井戸があつたが、湧水に乏しく、戦後しばらくして集落北の金武湾側の崖下の阿下茶原にある水源地から簡易水道が敷設され、1976年4月に本島と同じように給水されるまで、集落の重要な水資源として利用された。

この「アギチャ」のアギは、「陸崖」を意味し、チャは下が転訛したもので阿下茶原は「崖の下のところ」という意味になる。

北部のリゾート地として知られる「カヌチャ」は外来語の感を受けるが、その語源は「川の下」である。「カワノシタ」↓「カーヌシタ」↓「カヌシタ」↓「カヌシチャ」↓「カヌチャ」となったのである。